



2010年12月～2011年2月の期間に、海外提携機関より、4名の招聘研究者をお迎えいたしました。

名前	所属	招聘期間
張 青 仁	北京師範大学民俗学専攻 博士課程	2010年12月6日～12月26日
李 莉 薇	中山大学中国非物質文化遺産研究中心 博士課程	2010年11月1日～11月21日
福田 忠之	浙江工商大学日本文化研究所 副教授	2010年11月1日～11月21日
姚 美 玲	華東師範大学对外漢語学院 副教授	2011年2月8日～2月21日

神社与日本民众生活



張 青 仁（北京師範大学）

一 研究意义

作为日本的国教，神道教与日本民众的生活息息相关。笔者拟对鹤岗八幡宫、濑户神社、镰仓宫、饭泉观音、寒川神社等地进行调查，探讨作为日本固有的宗教组织的神社在新旧年交替之际如何创造时间分界线并影响民众的日常生活，分析神道教对日本民众生活的意义，以期启发中国民间信仰的相关研究。

二 神社与民众生活

1 濑户神社“岁知式”

“岁知式”是日本神社年底的一个仪式，民众通常在这天将家中已供奉一年的神具拿到神社，等待神主在除夕之夜将其烧掉，同时也在这一天购买下新的神神。“岁知式”当天，濑户神社的左侧早已设立了很多摊位，上面摆放着达摩，七福神等众多神具。顾客购买后手持七福神，店主面对顾客，在“呦呦哟”的声音中将硝石擦出火花，颇似中国的开光仪式。

2 鹤岗八幡宫的“月次祭”与“煤拂祭”

神社通常会在每月举行固定的仪式称为“月次祭”，鹤岗八幡宫在每月的1日和15日都会举行月次祭。12月15日的月次祭是由八幡宫的不同等级的神主，神女们共同完成的。参与祭祀的神主包括等级最高身着白色和服的宫司，身着紫色金纹的祢宜、紫色银纹的权祢宜和黄色和服的出仕。神主，神女们从神主殿出来，先到左侧神社朝拜，完毕后再往主殿。神女在左侧持花伴奏，后到主殿持花献舞。拜殿内神主们叩首，神女表演完毕后，神主神女从左侧走出。

八幡宫还举行了“煤拂祭”，这一祭祀意在清除掉一年的污垢，常由神主完成。八幡宫的煤拂祭甚至吸引了东京电力公司的人员的参与，他们驾着云梯车，清扫着寺院屋顶的污垢。

3 濑户神社神主为氏子个人举行的仪式

12月15日下午，濑户神社的神主为一位氏子举行了仪式。氏子的儿子30多岁尚未成婚，她前往濑户神社请求神主帮助。神主和妇人进去拜殿，神主念经完毕后，拿起白色的幅条朝神位，妇人头上挥舞，然后放至原处。神主起身再去叩拜，并在中间跪下念经，念经完毕后拍手。此后他站立举动铃铛和绿旗在妇人头上来回伴动。仪式完毕后神主将一个白纸的神具给她，二人均在中间叩拜，击掌。等待妇人坐下后，神主将一个黑色方箱搬出后给妇人一个信封，妇人，神主依次走出拜殿，仪式结束。

4 神社里的绘马

绘马是民众献给神灵之物，大小不等，通常挂在神社外侧。绘马的正面写着民众的各种祝愿，背面书有神社的名称。神主通常在年底的时候，将一年的绘马统一烧尽，献给神灵。临近高考，上野附近的一座供奉智者的神社吸引了众多的民众前去朝拜，两旁的绘马更是堆积如山，写满了即将参加高考的学生对于自己美好的祝愿，辑录如下：

合格祈愿
希望优介能考中第一志愿的大学
瞳

合格祈愿
希望能东京大学理科一类考试合格！
西武大希

三 结论

与含蓄内敛的中国民间信仰对许愿私密性的强调不同，甚至强调许愿的私密性成为“灵验”的前提，日本神道教对主体性的诉求显现出更为开放的态度。在日本神社里，绘马上写满了诸多信众的请求，包括升学，祈求家人身体

健康、新年祝福之类、甚至在镰仓宫还有将个人身体健康的祝愿写在小人身上，而这与中国民间信仰中强调许愿的私密性大相径庭。笔者曾于2010年对冀中地区的三皇姑信仰进行调查，不少信众在受访时均表示不能将其所许的愿望说出，否则就不灵验了。

尽管在日本存在神佛之争，宗教信仰的合法地位始终得到认可，且神职人员的身份被主流社会接受。明治时期对神道系统建立是建立在对民间信仰吸收的基础之上，表明

日本政府对宗教作为权力文化网络的作用是认可的。对比之下，中国始终将民间信仰排除出去，对自身合法性的诉求成了中国民间信仰主要任务。在此背景下，也就出现了诸如范庄龙牌会被冠名为中国龙文化博物馆的滑稽剧，而找不到合法性的民间信仰场所之能如铁佛寺庙会一般消失于政府的推土机下。而在这一过程中，却忽视了民间信仰的基本作用。事实上，在一个越发刚性的社会中，民间信仰在民众生活中具有重大的意义。

二大演劇総合誌から見られる 中国伝統演劇研究



李莉薇（中山大学）

一 はじめに

今回は、20世紀日本における京劇の受容というテーマで、中国伝統演劇、中日演劇交流に関する研究や報道について、『演芸画報』、『演劇博物館紀要』、『演劇論集』（演劇学会紀要）など演劇関係の雑誌、特に演劇総合類雑誌である『悲劇・喜劇』、『テアトロ』を中心に調査した。『悲劇・喜劇』の1947年10月の創刊号から、2010年6月号まで、合わせて716号、『テアトロ』の1934年5月の創刊号から、2010年10月号まで、合わせて839号を調べた。

二 二誌について

『悲劇・喜劇』誌は日本演劇関係の重要な雑誌の一つで、1947年秋（昭和22年10月1日）、早川書房により発行された。また、『テアトロ』も日本演劇関係に数えられる雑誌の一つであり、昭和9年5月創刊、秋田雨雀が初代編集者となった。戦争中、一時休刊となったが、

1946年10月号（8巻1月号）に月刊として復刊し、現在まで続けられている。

三 二誌から見られる中国伝統演劇研究の概況

『悲劇・喜劇』は40、50年代において、欧米の文芸思潮の影響を受けたからか、主に新劇の報道、評論を中心としていた。中国演劇関係についての内容はほとんど見られなかった。調査したところ、最初に中国演劇に関する報道は59年1月号で、中国演劇の舞台についての内容であった。60年代になって、京劇をはじめ、中国の演劇に関する紹介はあったが、ほんの少しだけであった。70年代中日国交回復の時から、中国伝統演劇に関する内容が次第に多くなってきた。80、90年代に入ってから、中国伝統演劇の報道は一段と多くなったし、中日演劇交流の新しい視点も見られるようになった。この時期において、『悲劇・喜劇』1997年8月号（N0 562号）から、1998年11月号（N0 577号）まで、12回にわたり有沢晶子が翻訳した回想文『梅蘭芳舞台生活四十年』が当誌に掲載されたことは90年代中日演劇交流の上で最も特筆すべきことだと言えよう。総じていえば、80、90年代以降すでに単なる紹介、報道にとどまらず、本格的な研究も見られてきた。

一方、『テアトロ』は『悲劇・喜劇』と比べて、比較的演劇交流を重視していると言えよう。創刊号から、『海の彼方』というコラムが設けられ、外国の演劇状況を紹介している。たとえば、創刊号に中国、朝鮮演劇の状況についての報道が見られる。また、1956年梅蘭芳の3回目の訪日公演前後、当誌も京劇の紹介に力を入れた。更に、中日国交が遮断されていた60年代においても、



『悲劇・喜劇』誌

『テアトロ』誌